慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	客観的価値論批判 : 特にオッペンハイマーの価値論
Sub Title	
Author	気賀, 健三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1934
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.28, No.1 (1934. 1) ,p.91- 132
JaLC DOI	10.14991/001.19340101-0091
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19340101-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

VI 日本
鄭貫正論進行……

×　×

附記　本稿は既に本誌に掲載せられた拙稿「ジョン・ヘイの『門戸開放』宣言」（一九三三年二月號）及び「滿洲に於ける『弗外交』の發端」（一九三三年七月號）の續編を成すものであつて、「支那に於けるアメリカ帝國主義」研究の一部である。

（一九三三―一二―二三稿了）

客觀的價値論批判

――特にオッペンハイマーの價値論――

氣賀健三

一

經濟學上の價値論の任務は各種財貨の交換關係を決定する事情を究明することに在る。即ち今或財貨の一定量が他の或財貨のx量又はy量と交換されるとすれば、其財貨が其x量又はy量丈けの購買能力即ち交換價値を獲得するに至つたのは何故であるか、如何なる事情が斯く〳〵の交換比率を各財貨に對して賦與するのであるかの疑問を解くことが價値論の主要任務である。此問題解決の爲に捧げられたる文獻は殆ど無數と云つてよく、其見解も亦詳細に分析すれば千差萬別の有樣であるが、今日では各學說の基本的特質を二つに大別して一を主觀主義の價値論、他を客觀主義の價値論と爲し、從來の大部分の價値學說は其何れか一方に編入せられるが常である。前者は交換價値決定の原因として主觀的要素を强調するもの、後者は之と反對に客觀的要素を强調するものゝ謂である。主觀的價値論を主張する現代の代表的學說は所謂る限界效用學說、客觀的價値論を代表する代表的理論は古典學派の生產費學說である。最近に至つて兩者を折衷し、又は之を包括する所の折衷主義或は二元論と稱せらるゝ價値學說があ

り、現學界に於て大に重きをなして居る。其說く所に據れば、主觀的要素又は客觀的要素の何れか一方のみに價値の決定原因を求めることの誤謬を指摘して兩要素共に相並んで價値決定の要素として同等の資格を承認せらるべきであるといふのである。斯學派に屬する者の一人として、リカードーの價値論に好意を寄せるディーツェルは古典學派の生產費說も墺太利學派の限界效用說も、互に相排斥し合ふ可き性質のものでなく、兩者共に相對立する他の要素を中に包括するものであり、偶〻他の何れか一面を强調することを怠つたが爲に或は主觀主義として或は客觀主義として相反噬するが如き事態を齎らしたに過ぎぬといふ意味のことを主張して居る。(註二)

註一　H. Dietzel: Die klassische Werttheorie und die Theorie vom Grenznutzen; im Jahrb. f. Nationalök. und Statistik, N. F. 20. Bd. 及び Theoretische Socialökonomik, Leipzig 1895. 參照

ディーツェルの斯る主張は初めベーム・バヴェルクとの論爭の爲に述べられたものである。而してベーム・バヴェルクも亦其效用說が任意に再生產し得る財貨の價値決定の要素として、生產費用の意義を決して否定するものでなく、中間的原因としてゞはあるが價値決定に參加することを承認する。其處で學說の些細な末節を除けば、リカードーの價値論とベーム・バヴェルクの價値論とは根本に於て相調和する筈のものであり、唯〻前者が任意に再生產し得る財貨のみに適用せらるゝ學說たるに對し後者は此種財貨のみならず、廣く市場に於て交換せらるゝ財貨一般に適用せらるゝ學說として、共に二元論的價値論の性質を帶ぶるものであるといふことに爲る。斯樣に考へて來ると、二元論者が效用說なり生產費說なりをば一方のみに偏する一面的議論として一概に排斥することは必しも當を得て居ることにならぬであらう。但し斯樣な解釋が、當初の主張者自身の意向と果して一致するか何うかは確に一の問題である。がそれはそれで別箇の問題であつて、二元論的價値論の正しさを信ずるものが或は生產費用說に就て或は效用說に就て、其奧底に横はる二元論的基礎を指摘し、之を取上げて以て自說と調和せしめやうとする試みは當初の主張者の意向に依つて制限を受けねばならぬ筈のものではない。筆者は二元論價値論の正しさを承認するものゝ一人であるが、同時に又限界效用說と二元論とが必しも相反撥し合ふものでないと考へるものである。此立場よりすれば生產費用說は經濟的財價値一般の中で特に再生產し得る財貨の價値のみに當嵌められる理論としての意義を認められるに過ぎなくなる。詳言すれば、交換價値一般の決定原因としては需要者の主觀的評價といふ主觀的要素と財貨の存在量といふ客觀要素が擧げられるが、再生產し得る財貨の場合には、客觀的要素として特定財貨の存在量の代りにそれの生產に必要なる根本的生產手段の存在量と各財貨の生產に必要なる生產手段の數量を表示する技術的係數とが擧げられることになる譯である。

吾人の觀る所を以てすれば、從來の一面的外觀を取除きたる兩面的價値理論は今日の價値學說一般の推移の方向を示すものゝ如く思はれ、殊に生產費用說又は勞働價値說等の客觀主義的理論は或は效用說に依り或は二元論に依つて全く克復され、包含されて仕舞つた觀がある。效用說と衝突するものではないと言つて、正に效用說に依つて突落されやうとした墓穴から費用說を救ひ上げたディーツェルは結局自ら二元論といふ別の墳墓を費用說の爲に用意した樣なものである。

之に對し客觀主義の立場を守つて敢然と效用說に逆襲する理論家が居らぬことはない。最近ではフランツ・オッペンハイマーが此方面の有力なる一人である。オッペンハイマーはリカードー並にマルクスの勞働價値學說に深き影響を受けたる一人である。而して自ら「客觀的價値學說の革新」と自著に標題を附して、自說をば「商品價値の勞働價値說」と名付け、リカードーの理論を勞働數量說、マルクスのそれを勞働時間說と呼んで對照させては居る

ものゝ、直ちに之に註釋を加へて「但し此等の學說の間に根本的見解の相違がある譯でなく唯〻强調の程度の相違があるに過ぎぬのは明白なことである」（註二）と言つて居るのである。然かも、オッペンハイマーの自負する所に依れば、彼の理論は、從來の客觀的學說と全く出發點を異にすることに依つて優越して居る許りでなく、「其代表者達に加へられたる如何なる攻擊にも降服するものではない」（註三）といふのである。

註二　F. Oppenheimer; Wert und Kapitalproft. Neubegründung der objektiven Wertlehre. Jena 1926. S. 45-46 參照（以後引用に際し W. u. K. と略す）

註三　System der Soziologie. 3. Bd. Theorie der reinen und politischen Oekonomie. Jena 1924. S. 788, 796（以後引用に際し Theorie と略す）

既にリカードーの勞働價値學說は其後繼者達に依つて漸次生產費用說に轉換せしめられ、マーシャルやディーツェルに至つて折衷主義と妥協するに至り、又同じリカードーの學說を基礎にして古典學派の人々と反對の方向に即ち極端なる勞働價値說に之を改變せるマルクス主義の勞働價値說は特殊の社會主義的信仰を有するものゝ外殆ど之を支持するもの無き今日、オッペンハイマーの客觀的學說は確に一つの異彩である。オッペンハイマーは果して自稱する通り客觀的學說を新に建設し得たか。如何なる點に於て古き客觀主義の理論家に優越し得るのか。效用說乃至折衷說を排斥するに果して成功して居るか何うか。此等の點に就てオッペンハイマーの所論を檢討し併せて二元論の根據を明にすることが本論文の目的である。

二

順序として先づオッペンハイマーの價値論の大要を述べやう。（註四）

註四　オッペンハイマーの價値理論は、最初一九一六年に出版せる Wert und Kapitalproft の中で述べられたのであるが、其後諸學者の批判に遭ひ一九二六年に內容を改訂して第三版を刊行し爾來其儘現在に及んで居る。此書の中で彼は價値並に資本利潤のみに關する自說を明確に敍述して居る。此外に、一九二四年に改訂第五版を刊行せる彼の大著社會學大系（System der Soziologie）があり其第三卷は經濟學一般を取扱つて居る。此書の中では、彼の積極的立場は散漫すぎる傾があり、又其論述する所は W. u. K. 以上に出て居らぬ唯々效用說の批判を試みる部分に於ては後者の全く論述せざる部分を包含して居る。其故に彼自身の價値論に就ては W. u. K. を、其效用說批判に就ては Theorie を參照すれば充分であらう。

價値又は交換價値といふ概念はオッペンハイマーに依れば「任意に再生產し得る財貨の恒久的且つ平均的の價格、換言すれば需要供給の關係の變化に基く偶然の動搖より抽象せる價格」（註五）を意味する。即ちオッペンハイマーの對象とする所の價値は、古典學派に於ける自然價格又は正常價格に相當するものに外ならぬ。問題は市場經濟の下に於て時々刻々變動する所の市場價格でなく、その中心的歸着點たる正常價格が何故それ〴〵一定の高さに定まるのであるかといふことである。正常價格の成立を見る爲には「需要供給の關係の變化に基く偶然的動搖」を抽象することと、即ち所謂る經濟的靜態を假定することが必要である。オッペンハイマーの言ふ通り幾多の力が相對立して互に作用し合ふ場合、外部から何等の刺戟を蒙らぬ限りそれ等は一定の狀態に釣合を保ち少しも動搖を起さぬ樣になるものである。（註六）斯樣な平衡狀態は固より現實の社會に成立するものでなく、之を假定することは一つの理論的虛構である。併しながら障害を除去する爲に孤立化的方法を採用し本質を見究める爲に偶然を抽象し去ることは方法論上當然承認さる可きである。抽象的孤立化的方法を利用することは、オッペンハイマーの所論を俟つまでも

なく、複雜なる社會現象を對象とする理論的科學の寧ろ當然の任務とする所でなければならぬ。

註五　W. u. K. S. 1.

註六　W. u. K. S. 2.

然らば市場經濟に於て、相對抗する力とは何であるか、其力は何を動力として活動し、如何にして平衡狀態に安定するか。

オッペンハイマーに依れば市場經濟とは個々の經濟主體が勞働の分割並に其結合を基礎として自由競爭を行ふことに外ならぬ。各經濟主體間に行はるゝ競爭といふのは價格上の爭である。賣手は可及的高き價格を以て提供し、買手は可及的安き價格を以て購入せんと努める。此競爭は、若し他から障害を蒙らなければ一定の價格水準に達した上で止む。需要と供給とが平衡を保つとは此事態を指すものに外ならぬ。所で問題は一體何故に「平均的且つ恒久的に」或一定の價格水準が定まるのかといふことである。蓋し價格そのものは需要なり供給なりに影響を與へるものであるから、その何れもが「恒久的に平均的に」安定するに至るには其處に偶然的に非ざる特別の理由がなければならぬ。即ち相敵對する力が最早や競爭を繼續する理由がなくなる樣に爲らねば、安定狀態は成立たぬ筈である。

或は高き價格を求め或は低き價格を望む競爭者連は何を目指して斯く爭ふのであるか又其平衡點は何處に於て達せられるのか。

オッペンハイマーに依れば「競爭者は『可及的高き價格』といふ手段を通して可及的高き所得といふ究竟目的を達成する。其故に經濟の平衡はあらゆる競爭者のあらゆる所得が競爭の行はれる限りに於て平均する點に於て定まる」と。（註七）此命題に於て注意を要することは先づ第一「競爭の行はれる限りに於て平均する」といふことである此一句は實際の社會に於て經濟理論的に無視することの出來ぬ重要な障害が競爭を妨げ、所得の平均を不可能ならしめて居るといふ意を含んで居る。重要な障害とは何であるかといふと、オッペンハイマーは「獨占」と個人の「性能」（註八）の相違との二つを擧げる。

註七　W. u. K. S. 7

註八　a. a. O. S. 11.「性能」とは Qualification の譯字である。オッペンハイマーの此字の使ひ方は頗る明瞭を缺き、色々な意味を之に含ませて居るので適當な譯字がないが、其詳細な內容は後に論ずるから、暫く假に「性能」と譯して置く、大體の意味は當篏つて居ると思ふ。

獨占とは自由競爭が無制限に行はれぬといふことである。換言すれば生產者が任意に生產に參加し得ぬか又は參加することを許されぬといふことである。普通に獨占は全然競爭が排除せられたる狀態を意味するのであるが之に較べるとオッペンハイマーの獨占の解釋は餘程寬大であると言へる。

第二の障害たる「性能」とは、オッペンハイマー獨特の言葉なのであるが、その說明に依れば、「普通には……一個人の客觀的特性の綜合概念として使用されるが、科學的に正確に解釋すれば社會的評價に依り、社會が一個人に或一定の性能を認めることなのである」、（註九）或一定の性能とは「個人が社會に於て一定の社會的地位を得る能力」（註一〇）を意味する。之を經濟的に觀れば各個人が「一定の所得を得る能力」（註一一）を意味することになる。

註九　註一〇　註一一　W. u. K. S. 12.

オッペンハイマーに依れば各個人の性能がそれ〴〵一定して居ると認定することは方法的に必要な假定であると

同時に、「全生産者が何れも皆種々なる程度の性能を以て『評價され』、且つそれに相應せる所得を獲得するといふことは吾人に與へられたる經驗的材料に屬するのである」。（註一二）換言すれば「性能は靜態理論に於ては直接に所得を以て測定せられるのである」。（註一三）。

註一二　一三　W. u. K. S. 12.

其處で曩に述べた所の「競爭の行はれる限りに於て平均する」といふ一句を書直せばつまり「性能の相違と獨占的狀態に對する地位の相違とが、所得の差異に影響を及ぼさぬ限りに於て、各人は……相等しい所得を獲得する」（註一四）といふことに爲る。所がオッペンハイマーは理論的正確を期する爲に暫く獨占が存在せぬものと假定し、中庸の性能所有者の中等の所得が確定せるものと假定する。

註一四　W. u. K. S. 14-15.

而して「正常の性能を認められたるもの」(normal Qualifizierten)とは此場合オッペンハイマーに依れば『限界生産者』である。彼は限界生産者の說明をリカードーから借りて來る。即ちリカードーは曰く「あらゆる財貨の交換價値は……當該財貨の生産に必要なる勞働量の大小に依つて決定せられるが、其勞働とは何等特殊の熟練を備ふることなく且つ又最も惠まれざる狀態の下に於て其生産を執行する所の者であるとする」と。（註一五）

註一五　W. u. K. S. 15.

抽象を之程迄極端に押進めて來ると問題は至つて簡單になる。即ち市經濟に於ける生産者は何れも皆平均的性能を備へた限界生産者であり、從つて其所得も又均一に中等程度のものであるといふことになる。斯くの如き假定の下に於て平衡狀態は各經濟主體の所得が均一になる所に於て到達せられるとオッペンハイマーは言ふ。

最後に殘る問題は所得の意味である。

抑、各經濟主體が可及的最高又は最底の價格を求める努力といふことをば、其經濟行爲の原動力と見ることなく經濟行爲の究竟の目的は可及的最高の所得の獲得に在るのであつて最高又は最底の價格に對する努力とは單に之を獲得する手段に過ぎぬといふ考へ方はオッペンハイマー獨自の見解に屬する。彼の言葉に據ればそれは「決定的進步」（註一六）を意味し、從來の平衡概念に依つては說明し得なかつた安定點を表示するもの（註一七）なのである。

註一六　一七、Theorie, S. 623.

それであるから所得の意味はオッペンハイマーの理論では頗る重要な地位を占めて居る筈である。

彼に據れば所得とは生産者が、生産物を賣却して得る利益である。限界生産者は地代を生ぜざる土地を利用するものであり、又利潤を獲得することが無いので、――オッペンハイマーに依れば利潤は獨占(階級的獨占)の結果として生ずるものであるから獨占のない社會には利潤は生れない――自己の勞働に依るより外に利益を得る途がない。買入れた原料に對する支出をば生産せられたる財貨の價格から差引いた殘額、即ち自己の執行せる勞働の賃銀に相當すべきものが利益として殘り、それが唯一の所得を構成する。此所得は名目的所得と實質的所得とに區別される。前者は一定の貨幣額、後者は此貨幣に依つて其所得者に齎らされる心理的所得の全體である。オッペンハイマーが自己の腦裡に畫いて居る所得概念は表面上、前者即ち名目所得である樣である。

之丈けの抽象的假定を行つておいてから、オッペンハイマーは價値決定の法則を數學的に表現する。

正常の性能所有者の所得をE、性能の相違の爲に起る所得の增減をq、獨占の爲に生ずる所得の增減をmに依つて表はすとすれば其社會に於ける社會各人の所得は次の方程式に依つて現はされる。

$$e_i = E + q_i + m_i$$

此方程式からして交換價値決定の法則が頗る簡單に導き出される。價格を構成するものが、生産者の投入せる費用(オッペンハイマーは之を自己費用(Selbstkosten)と呼んで居る)と之に加へたる生産者自身の勞働より生ずる利益とであることは前述の假定から當然推論される。其故に今一定の期間に於ける當然生産者の産出する生産物の數量(オッペンハイマーの用語に據れば「生産力を表す數字」)をm、自己費用をsとすれば財貨の靜態價格vは次の方程式で表はされる

$$v_i = \frac{E + m_i + q_i}{n_i} + s_i$$

此方程式の中で $\frac{E + m_i + q_i}{n_i}$ とは生産が得る所の一個當りの利益(gi)に外ならぬ。靜態理論の約束に從へばEは一定して居るのであるから、gを構成する要素は總て當然一定して居ることに爲る。sは何うかといふに、オッペンハイマーは之をも結局gにまで分析して仕舞ふ、即ちsとは元々勞働の生産物以外の何ものでもないといふのである。例へば反物の加工業者に取つては仕入れたる綿布の代價がsであり、加工する爲に之に加へたる自己の勞働がgを概成する。所で此sなる綿布は綿布生産者から見れば仕入れたる綿糸の代價sと綿布製造の爲に之に加へらる所の勞働に基く所得とから成立つ。綿糸は更に棉花なるsと之に加へられたる勞働gとにといふ具合にSは殆ど無限に分解されて行く。が最後まで行きつくと何が殘るかといふに、オッペンハイマーはgのみが殘りsは無限小に爲り零と化すると言ふ。何故零となるかいへば「生産者は結局『無料の財貨』に加工するか又は『無料の勞働者』であるか何ちらかであるからである」(註一八)と。最後まで分解されたるsが零に爲つて仕舞ふとすれば、オッペンハイマーの方程式は正に解決されるに相違ない。而して次の如き命題が成立つ。「あらゆる價格は之に參加せる全生産者の收益より成る」(註一九)と。

註一八　一九　W. u. K. S. 18. オッペンハイマーはsの抹消を證明する方程式を述べて居るが簡單の爲に之を省略する。

オッペンハイマーは此方程式の解決を以て、價値が最早や完全に説明されたと考へる。即ち曰く

「斯くして、靜態價格の此一般的法則は、縱令ひ尙ほ不完全であるとは云へ、客觀的價格論の復權と主觀的價格論の擊退の爲には充分滿足なものである。何故かといへば、方程式は唯、客觀的な、社會的に一定せる材料のみを含み、主觀的な效用評價の要素は少しも其中に入り込んで居らぬからである。獨占的狀態の存在せぬ所に於て生産を行ふ所の正常の性能所有者の全部に、相等しい高さで流れ込む所の基本的所得は、社會的に即ち客觀的に一定して居る。而して又生産力を表す數字は技術の狀態に依つて一定して居る。性能の相違に基く所得の增減や、獨占狀態の下に於ける生産に基く所得の增減も亦一定して居る」(二〇)と。

註二〇　W. u. K. S. 22.

オッペンハイマーは之丈けの説明で以て未だ滿足しないで、此方程式を更に簡單にする。即ち上記の方程式から先づ最初にmを取去る、其理由に曰く獨占的狀態には法律的のものと自然的のものとあるが、前者は絶えず變動するを常とし動態理論に屬するものであり、後者はそれが現實に其存在する場合稀少であるから特に問題とするに足りないと。換言すればオッペンハイマーは靜態的價格の理論をば專ら任意に生産し得る財貨のみに當嵌まる方程式に作り直すのである。此訂正に依つて方程式は次の如く改編される。

$$v_1 = \frac{E \pm q_1}{n_1} + s_1$$

オッペンハイマーは次にqをも取除く。其理由に曰く、「性能の優劣は任意に再生産し得る財貨の價格には影響せぬからである」（註二）と。何故影響せぬのか。曰く「それは、靜態理論に於て如何なる部門に於ても限界生産者が正常の性能を持つといふ吾人の約束から直ちに推論される」（註三）と。蓋し生産費用を決定する所の正常の性能所有者の所得Eに在つては±qは零に相違ないといふのである。即ち±qとは正常の性能所有者の所得から離反する其離反の程度を表す記號に外ならぬものであるのである。

註二　W. u. K. S. 24.

註三　W. u. K. S. 25.

但しオッペンハイマーは之に但し書を附ける。といふのは限界生産者が習熟に依つてより優秀なる性能を有するに至つた場合のことである。其時は當該生産者の所得は習熟せざる正常性能者よりも一層多額の所得を得るのを常とすると。何れ丈けの多額を得るのか、オッペンハイマーは正確に之を計算しやうとする。即ち其餘分の所得額は自己費用の中に記錄せられると答へる。その意味はかうである。先づ初め其生産者は其優秀なる性能に習熟する期間に於て修養するといふ事情の爲に、修養を受けぬ他の正常の性能者と等しい程の正常所得を得ることが出來ぬ。其上又其修養の爲には一定額の自己費用を支出せねばならぬ。而して習熟期間に於ける此等の失費は修養完成後、勞働に從事する一生の間に償却せられねばならぬ。優秀なる性能の爲に生ずる所得の追加額とは此償却費に相當するといふのである。

斯樣な次第であるから靜態理論に於て任意に生産し得る財貨の價格を論ずる場合にはqは之を零として無視してよいとオッペンハイマーは說く。さうすると方程式は次の如く簡單に爲る。

$$v_1 = \frac{E}{n_1} + s_1$$

而して

$$\frac{E}{n_1} = g_1$$

であるから

$$E = g_1 \cdot n_1$$

と爲る。そこで

$$g_1 \cdot n_1 = g_k \cdot n_k = g_l \cdot n_l = \cdots\cdots$$

となる。

價格を表す方程式は

$$v_1 = \sum \frac{E}{n_1} \qquad v_k = \sum \frac{E}{n_k} \qquad \frac{v_1}{v_k} = \frac{\sum \frac{1}{n_1}}{\sum \frac{1}{n_k}}$$

となるであらう。而して約束に從つてあらゆる限界生産者が等しい時間丈け等しい熱心さを以て働くとすれば、nは生産物に費されたる時間に反比例するものであるから

$$\frac{v_1}{v_x}=\frac{\Sigma t_1}{\Sigma t_x}=\frac{t_1}{t_x}$$

となる。言葉を以て之を表せば

「任意に再生産し得る財貨の靜態價格は、之に關係せる全生産者に依つて之に投入されたる全勞働時間に比例する。」（註二三）此勞働時間は何に依つて定まるかといへば、「法律的獨占の存在せぬ所では、自然的に定まれる社會的抵抗の程度が之を定める。詳言すれば自然的には自然物の『相對的な經濟的稀少性』が、社會的には技術の狀態が、之を定める」（註二四）

註二三　二四　W. u. K. S. 27

以上がオッペンハイマーの價値論の要約である。此説明に吾人は果して滿足し得るであらうか。オッペンハイマーは自稱する如く、主觀的要素を全く排斥して交換價値の形成を説明し得たであらうか。吾人の見る所を以てすれば彼の試みは全然成功して居らぬ。それ許りでなく勞働價値説の最も典型的な缺點を露出して居る。之を明にするのが吾人の次の任務である。

三

先づ最初に問題と爲るのは、靜態價格形成に於ける原動力たる經濟主體の「最高の所得を目指す努力」である。オッペンハイマーに依れば、市場に於ける經濟主體が可及的安く買ひ又は可及的高く賣らうといふ努力は古典學派が假定する原動力であるが、それは單なる手段にすぎざるものであり、其根源は最高所得の獲得に發するといふ。

吾人の觀る所に據ればオッペンハイマーの此假定は正しくない。正にアモンの指摘する通り（註二五）可及的高價に賣るといふことと可及的多額の所得を追求するといふことゝは必しも一致するものではない。吾人が一般的に提供せる給付に對して可及的多大の反對給付を受取らんとするのは正當なる假定として直に承認せられるが、それは直ちに可及的多額の所得追求を意味するものではない。例へば或勞働者はそれ〴〵二つの異つた報酬を與へられる機會に遭遇した場合に、必ず一層多額の報酬を與れる機會を選擇するとは限らぬ。彼は先づ自己の給付すべき勤務の性質を二つの場合に就て考慮するに相違ない。其結果多額の報酬を與へらる方の職業の性質が其過剩額に依つて償はれる以上に自己に不適當であると考へるならば敢て之を選擇せぬであらう。換言すればより多額の報酬を受取ることを斷念し、より少額の所得機會の方を選擇するであらう。

併しながら、最高所得の追求と最高價格の要求とは常に一致せざる概念であると限られた譯ではない。一定の制限の下に於ては兩者必ず一致する。一定の制限の下にとは生産者が處分せんとする特定の財貨、特定の勤務に就て論ずる場合である。前例に據つて説明すれば勞働者はより少額の報酬を得る機會を選擇することは選擇したが、さればと言つて無暗に自己の勞働を低廉に賣却することを肯ずるものではなく、必ずや數多の同種購買者の中で可及的高價に其一定性質の勞働をば買つて呉れる者に之を賣却せんとするに相違ない。而して可及的高價に賣却することは結局所得額を增加する所以となるに違ひないであらう。

註二五　アモンは Zeitschrift f. Volkswirtschaft u. Sozialpolitik に於て三回に亘りオッペンハイマーを批評して居る。筆者は不幸にして此文獻を參照し得なかつたが、クルト・ウェルナーの著 Oppenheimers System des liberalen Sozialismus. Jena 1928. を通じて其論旨を熟知するを得た。

由是觀之、オッペンハイマーの假定は全然誤りであるのではなく、之に上述の如き一定の制限を附けることに依

つて漸く正しさを認められるものである。斯く制限を附することは何を意味するかといふに、最高所得獲得の爲にする各生産者の競爭なるものは、唯一同一品質の職業、同一品質の給付のみに當篏る命題であつて、生産部門を異にし、給付の品質を異にする場合には、斯る假定は適當でないといふことを意味する。

從つて、此種の競爭に依つてあらゆる生産者の所得が均等になるといふ法則も亦同一品質の給付の場合にのみ當嵌るものであつて品質を異にする給付を提供する生産者相互間に在つては所得の均等は實現せられぬ結果に陷る。

オッペンハイマーは、所得をば一定の貨幣額と解する限り正に此非難を甘受せねばならぬが、同時に彼は斯樣な批評を俟つ迄もなく、自ら之を意識して居ると抗議する理由がないではない。その理由となるものは彼獨特の「性能」（Qualifikation）の概念である。彼に據れば、靜態理論に於て性能は客觀的に一定せられたものであり、然も限界生産者は何れも皆正常の性能所有者といふことに假定されて居るのである。其故に、最高所得を追求する生産者を云々する場合には、生産者が總て殘らず同一品質の給付を爲すものと假定してあるのだから最高所得の追求と言つても最高價格の要求と言つても其間に喰違はない筈になる。斯樣に解釋するならばオッペンハイマーの命題は確に救はれる。アモンの批評に答へて彼が「それは用語上の誤解を論ずるものに過ぎぬ」「アモンが『自己の生産物に對して可及的最高の價格を求める生産者の努力は、――一定の制限の下に於て一般的に妥當し且つ一切を支配する力である』と述ぶるのは余の意見と全く一致するものである」（註二六）と言つて居るのを推測するならば前記の如くオッペンハイマーを解釋することは適切であると言ひ得るであらう。

註二六　W. u. K. S. 8.

併しながら問題は之で解決せられた譯ではない。それでは「性能」とは一體何か「性能」を與へられたるものと假定することは果して正當であるか何うかといふ疑問が當然生ずるであらう。此疑問は暫く措くことゝして、吾々はアモンの批評に對する今一つの答へ方が在ることを指摘しやう。それを吾々はオッペンハイマーの所論の中から引出すことが出來るのである。それといふのは外でもない。「所得」をば心理的所得と解釋することである。若し斯う解釋するならば、オッペンハイマーの最初の命題は無條件に正しい。何人でも心理的滿足感が最大であらんことに努めるといふのは確に事實に立脚せる正當な假定である。客人が自己の生産物に對して可及的最高の價格を求めたり、購入する財貨に可及的最底の價格を與へんとする努力は畢竟するに最大の幸福感を獲得しやうとする目的から出ずるものであるとするのは決して空虛な虛構とは云へぬ。否な寧ろ理論的に正當なる前提と看做し得るであらう。

所得の意味を斯く解釋するに就ては勿論吾々が勝手な推測を下す譯では無く、それ相當の論據がオッペンハイマーの所論の中に見出されるが爲に外ならぬ。即ち彼は爾餘の勞働價値說と比較して自說の優れたる點を論じて次の如く述べて居る。

「……然るに吾々の理論は商品價値の費用說又は勞働量說の如く（リカードー及びマルクスの勞働價値說を指す――筆者註）循環に落入るものではない。吾々の理論は究極に於て、價格にも將た又費用（及び其價格）にも溯るものではなく、所得に溯るものである。而して所得とは交換價値ではなく使用價値である。『所得』といふ場合に……正しき理論は總て皆使用（消費）の爲に定めらるゝ財貨及び『勤務』の實質的數量を考へるものである。然るに使用に供せらるゝものは商品許りではなく、從つて交換價値のみならず使用價値、即ち欲望充足性をも有するものであ

る」。（註二七）或は又曰く「各個々の經濟主體に向つて供給される財貨の實質的數量は、縱令ひ其內容に於ては等しくないとしても相等しい。即ち價値に於て等しい、即ちそれは使用價値、又は主觀的價値の相等しい量である」（註二八）と。

註二七　Theorie, S. 792-793.

註二八　Theorie, S. 795.

所得をば使用價値の總計と解釋すること其自體はオッペンハイマーの自由であり、又誤りと看做すことは出來ないが、斯る解釋が彼の他の命題と調和するか何うかは問題である。

何故かといふに、主觀的使用價値なるものは各個人々々に依つて相違するものであつて相互間に之を比較することが出來ぬ。其故に各人の所得の均衡といふことは所得を心理的なものと解する限り、全然想像の出來ぬ觀念である。何如なる場合にあらゆる限界生產者の得る所の主觀的價値の總計が均一になるかといふことは客觀的に全く解決の致し方の無い問題となるであらう。さればオッペンハイマーのいふ平衡狀態なるものは確定不可能なる狀態の筈である。抑〻主觀的價値の量といふ概念そのものを客觀的に思惟することが困難である。

更に又價格を表す所の彼の方程式の中で、$\frac{E}{n}$といふ項は數學上全く解決し得ざる表現となる。即ちEは心理的なるもの〻總體を現すのに對し、nは個物の總數を現すものである筈であるから、前者を後者で除するなど〻は非論理の甚しきものである。

所得をば時に貨幣額と解し、時に使用價値と解することから生ずる此明々白々たる非論理には何等かの救ひ道があるであらうか。斷じて在り得ない。强ひて在るといふならば此非論理を非論理と考へない場合に免れ道があると言へる。換言すれば、主觀的價値は相互間で比較し得ると考へるか又は相等しい貨幣額は相等しい主觀的價値を表すと考へるならば、前述の非論理は非論理ではなくなる。吾人の見る所に據ればオッペンハイマーは例の彼獨特の「性能」の概念に依據して以て正に斯る言を平然と犯して居るもの〻樣である。即ち彼は所得が使用價値の總額であると斷言した上述の引用文に續けて次の如く述べて居る。

「何となれば、此場合前提に從つて總ての者は皆相等しい性能を認められて居るのであるからして、或他人の所得を自己の所得よりも一層高く評價するものは、彼の其新規の趣味傾向に應じて其生產の方向を變化することに依り、直ちに正確に此他人の所得を我物とすることが出來るからである。併しながら吾々は差し當り、如何なる方面に於ても變向の全く存在することのない靜態の中に在るのである。それ故に吾々は再び繰返すことが出來る。「此場合、あらゆる所得は二重の關係に於て等價値である。先づ第一に所得は生產費用に於て相等しい。何故かといへば、費用とは總て、均等の性能を有する勞働力を相等しい時間丈け投入することであるから。第二に所得は主觀的價値に於て相等しい。何となれば何れの所得も直ちに他のものに依つて代替し得られるから。正しく各個人は自己の所得を形成する所の財貨額をば主觀的に他人のものより一層高く評價する。――然るに斯く評價するのは、主觀を相互的に觀察して見てそれが等價値である場合に限られる。

「此處に於て余の觀察に依れば限界效用說が惱み拔いて然かも無駄であつたと思はる〻所のかの全問題中最も灼熱的なる問題は初めて充分に解決せらたるやに見受けられる。灼熱的問題とは即ち、種々なる個人の主觀的價値評定と『總價値』とを一つの共通分母の上に齎らすを得せしむる所の標準の問題である。限界效用說の出發點たる純個人經濟的見解よりすれば此個人相互間、主觀相互間の標準は獲得せられぬが吾人の指針たる『國民經濟的な』完全な

る見解よりすれば此標準は確に得られる」。（二九）

註二九　Theorie, S. 795.

斯かるオッペンハイマーの見解に對して先づ第一に指摘せねばならぬことはオッペンハイマーの所謂る「國民經濟的」解釋とは何であるか、限界效用說の「個人經濟的」解釋との相違は何處に在るかといふこと、第二には限界效用說は果して彼の所言の如く個人的主觀相互間の欲望滿足の比較に惱んだか何うかといふことである。

先づ第一の疑問から始めやう。オッペンハイマーに在つても效用學派に在つても、經濟學の根本的出發點は同樣である。即ち個人單位の市場經濟組織及び經濟的靜態の假定は兩學派に共通の要素である。而して經濟理論が直接には專ら價格形成論と分配論との說明を主要目的とするものであることも兩學派共通である。それから又オッペンハイマーは限界效用說の基礎たる欲望充足に關するゴッセンの法則並に「一財貨の價値は其限界效用に從つて定めらる」といふ墺太利學派の根本原則に對しては無條件に贊意を表して居るのである。（註三〇）

註三〇　Theorie, S. 105-111. 參照

然るにも拘らず、兩種の說の間に甚しき懸隔を見るのは何故であらうか。換言すればオッペンハイマーが價格論に於て限界效用の諸法則と全く絕緣して仕舞つて居ることの根據は何處にあるのであるか。彼は限界效用の說明をば正しいには相違ないが、經濟現象の一面的觀察に過ぎないと主張し眞の正しき說明の道は財貨の生產に費す勞働に在ると說くのである。效用說を價格形成論にまで演釋させることはオッペンハイマーに依れば結局循環論理に終るものと看做される。

オッペンハイマーは云ふ「生產と分配、供給と需要、價値と價格等、市場に於けるあらゆる現象は既に知れる如く根底に於て個々の社會成員の意識の內にある心理的現象に依つて、即ち、欲望と滿足の期待、犧牲（斷念）と、それから勞働であれ財貨であれ貨幣であれ何等かの投費に依つて生ずる所の內部的抵抗の克復等の如き全然內心的な內包的大さの比較考慮に依つて惹起されるものである。然るに……供給と需要、價格と價値は外延的大さであり、有價物の一定量として表現せられる。心理的現象は形而下的現象に變化する、主觀的現象は客觀化せられる。「此變化は吾々が個人經濟と市場經濟との間の限界を乘り越へる其同じ瞬間に起る。」（註三一）

註三一　Theorie, S. 434-435.

然らば其變化の論理的說明は如何。

限界效用學說に於は、オッペンハイマー其他幾多の反對者の非難にも拘らず、其自體としては、或は墺太利學派或はローザンヌ學派或はケムブリッヂ學派が主觀的價値より客觀的交換價値への轉化の說明を完成して居る。然も其說明の基礎となるものは「財貨の主觀的價値は其限界效用に依つて定まる」といふ命題である。而して此命題よりの演繹に際し、該學派は各人の主觀的價値相互の比較といふことを全然必要として居らぬ。各人はそれぞれ各種財貨に對する自己の主觀的評價を自覺して居れば、それ丈けで充分なのであつて、價格形成の說明には何の支障をも來たして居らぬと考へるのである。オッペンハイマーが、各人の主觀的價値の比較に於て效用說は苦んだと考へるのは效用說に對する誤解より出づるものと言はねばならぬ。

所で效用學派の此命題を價格論に適用することを欲しないオッペンハイマーは如何なる「國民經濟的」概念を持つて來やうとするのであるか。吾人の見る所に依れば、主觀的なものから客觀的なものへの變化を說明する役目を果すものはオッペンハイマー獨特の假定たる性能の概念であると推定するより外に解決の途はない。

茲で再び「性能」の概念が問題となつて來るが、「性能」とは爰に簡單に述べた如く一個人が當該社會に於て一定の所得を齎らし得る其能力」に外ならない。オッペンハイマーに於ては此「性能」は、靜態の社會に所得の均衡を齎らす原動力を爲すものである。然しながら此假定を以てしても爰に指摘せるオッペンハイマーの非論理は解決されぬ。若し「一定の所得を齎らし得る能力」といふ命題の其所得を量的なもの、外延的なものとするならば、それは畢竟最初から客觀的價値の世界に屬する概念であつて、主觀的價値の客觀化を仲介する假定とならぬ。客觀的價値が等しいからと言つて主觀的價値が等しいとは云へぬ。又若し之を心理的な所得と解するならば、解決せらる可き問題が最初から假定されて居つたことに爲り、說明は說明でなくなつて仕舞ふ。

或は又所得をば、其生產費用の反面から見るにしても同樣である。相等しい所得は相等しい勞苦を代表すると假定するのでない限り主觀の客觀化は說明せられぬ。併し、此假定が無意味其物であることは明瞭である。具體的な勞働量例へば時間的に測定せる一定の勞働量が「性能」を等しくする人々に在つては、必ず相等しい勞苦を表現するものであると想定するのは、言ひ換へるならば、相等しい勞苦を提供する人々の勞苦は相等しいといふことを意味するものに外ならぬ。然も此想定には相異つた人々の勞苦は互に比較し得るものであると爲す實に驚く可き前提が含まれて居ることを考へる必要がある。

由是觀之、オッペンハイマーは「國民經濟」概念に依つて主觀の客觀化を說明したとは少しも考へられぬ。所得に於ける彼のいふ二重の一致とは單なる獨斷であるかさもなければ市場經濟の理論とは關係の無い、無意味な立言である。

彼の獨斷であることを裏書する章句は容易に見出だされる。例へば曰く「今吾々が……個人經濟と市場經濟の限界を乘越へて、市場立會人の心理から市場に於ける價格の行動を探り入る爲に後を顧るならば、競爭價格に於て交換される有價物の主觀的均等といふ獨特の現象が吾人に與へられる」。（註三二）

註三二　Theorie, S. 441-442.

「生產物の價値關係は唯、單に規則的交換關係の結果として現れる許りでなく、尙ほ又各財が有する所の「心理的」價値の關係としても現れる。言ひ換へれば、交換關係は生產物の心理的價値の間の關係の表現として現れる。「約言すれば契約當事者は均等の意識を持つのである。而してそれは價値と對價との均等關係のみならず、……正當なる關係を意味する」（註三三）

註　Theorie, S. 442.

之を要するに、オッペンハイマーは客觀的價値が等しい場合には其の內部に潛む主觀的價値も亦相等しいと考へたものに相違ない。彼の曰く「事實、獨占の行はれて居らぬ所に於ては何處に於ても恒久的且つ又平均的に生產に於ては相等しい客觀的價値即ち相等しい費用が交換される。其處には客觀的均等が存在するといふ主觀的確信は正しい。主觀的なものから客觀的なものへの變化は自ら行はれる」（註三四）と。

註三四　Theorie, S. 443.

斯かる命題は單なる獨斷以外の何者でもない。其中には一言の證明も含まれて居らぬ。

是に由つて觀れば、オッペンハイマーが得意に爲つて選んだ所の獨特の出發點と稱する所得の理論は先づ失敗であると言ふより外にない。所得の心理學的基礎付けと其數量的解釋との間には何等の有機的關聯も無い。

其故にオッペンハイマーの價格形成論は、突然に市場經濟に於てそれ〴〵一定の「性能」を與へられて居る各經濟

主體が互に自由競爭を行ふといふ假定から始まるものと見ねばならぬ。其處で問題は「性能」の假定の是非といふことに移る。一定の所得――勿論貨幣額又は財貨量等の客觀的數量を意味するものと解して――を得る能力とは果して價格形成の說明の基本的假定たる資格のあるものであるか何うか。

四

前節で論じた所を要約すればかうである。オッペンハイマーは平衡價格の說明をば財貨價値そのものから始めないで各經濟主體の所得の均衡といふ假定から始める。所で所得とは何を意味するかゞ問題に爲つたのであるが、之を主觀的に解する場合と客觀的に解する場合と二つある。前の場合こそはオッペンハイマーの經濟學の出發點から當然演繹されるものである。然るにも拘らず、其解釋は所得其物の均衡は勿論、之より推論せらるゝ筈の客觀的價値の均衡を說明する假定として何の役にも立たぬ。それは市場經濟に於ける價格の成立と少しも論理的關係を持つて居らぬ。「性能」の概念は一見此關係を繫ぐ橋渡しの役を爲すものゝ如くであるが、それは單に形式上のみであつて畢竟獨斷とは背理の助を藉りるのでなければ、其形式に實質的內容を與へることが出來ない。吾々の判斷に依れば、オッペンハイマーは獨斷の途に據つて非論理を論理化し、言葉に意味を與へやうとしたのである。

而して若し所得をば、貨幣額であれ財貨量であれ一定の客觀的數量を表現するものと解すれば、所得の均衡といふことは確に得られる。がそれにはオッペンハイマーが明確に規定せる條件の外に更に今一つの條件がある。といふのは即ち同一部門に屬するあらゆる生產者が總て等しく互に競爭し合ふといふ條件である。換言すれば互に競爭し合ふ生產者の間では所得の均衡が得られるが生產部門を異にする生產者同志の間には直接の競爭がなく、從つて所得の均衡は起らぬ筈である。社會に於ける所得の一般的均衡が生れなければ、オッペンハイマーの理論に於ては價格の形成が說明せられぬことになる。其故にオッペンハイマーは何等かの形式で此破綻を救ふ道を講ぜねばならぬ。之に役立つものが即ち彼の「性能」の概念である。各生產者の性能を一定せるものと定め、又當該社會に於いて正常の性能所有者をば確立せらるゝものと考へ、而して如何なる生產者も、正常の性能以上にあるか或は以下にあるかに從ひ、其隔りに應じて一定のより大なる又はより小なる所得を獲得するものと想定するのである。其故に其社會に於ては正常の性能所有者が定まれば其れの所得の均衡が一定すべく、之が一定すれば、爾餘の生產者の所得も亦容易に類推せらるゝことに爲るのである。

斯樣な次第であるからオッペンハイマーの價値論の當否は一に「性能」の假定の當否にあるのである。それは果して是であるか、非であるか。

茲で一言注意すべきことは、オッペンハイマーが「性能」に依つて解決させ樣として居る所の問題が實はあらゆる勞働價値學說に附纏ふ所の頗る困難な問題であるといふことである。オッペンハイマーの言ふ所得とは、即ち生產者が提供する勞働の生產物の代價から自己費用を差引いたもの、略言すれば提供せる勞働の交換價値の總額に外ならぬ。然るに勞働の交換價値が其勞働の種類の相違、品質の相違に依つて著しく異なるものであることは明白な事實である。其故に費されたる勞働量をば各財貨の價格決定の原因と看做す學說に在つては、種類品質を異にする勞働の價値の相互間の比較は如何にして行はれるかといふ疑問を先づ解決せねばならぬ。

若し費されたるあらゆる勞働が均等の品質を有するものであるならば、勞働價値說に依據する以上其勞働の生產物の價値は正に其含む所の勞働量に依つて比較し得られるであらう。オッペンハイマーの言葉を用ひるならば、互に競爭の立場に在る生產者同志の所得は靜態に於て平衡狀態に達するといふことが言へるであらう。所が實際に於

ては勞働の種類は千差萬別である。極く類似して居ると思はれ仕事の例を取つて見ても大工の勞働と彫刻師の勞働とは著しく性質が異る。之の比較は如何にして行ふのであるか。或共通の標準の上に立つてその比較を實行せざる限り、各生産物の價値をば費されたる勞働量に應じて交換さるゝものと斷定することは出來ない。種類、品質の差異を問はず如何なる勞働も皆均一に勞働時間に依つて比較測定されると爲す考へ方が事實と合致せぬものであることは勿論である。若しある社會に於て大工の四日分の勞働が彫刻師一日分の勞働に相等する報酬を擧げるとすればそれは何故であるか。此疑問を解決せぬ限り勞働價値學說は如何なるものと雖も成立せぬ。勞働價値說の第一人者たるリカードーは此問題に殆ど指を觸れなかつた。古典學派に於ける其後繼者の一人ケアンズは所謂る不競爭集團の學說に依つてリカードーの欠陷を補はんとした。即ち生産費說は相競爭し合ふ勞働者の勞働の費されたる生産物に就ては當嵌るが、一度び競爭集團を異にする産物相互間に在つては當嵌らぬと說いたのである。當嵌らぬと說くことは取りも直さず生産費說又は勞働價値說の不備を表白するものに外ならぬ。即ち客觀的價値說に依つては、勞働の種類品質を異にする勞働生産物相互間の交換比率を決定する法則は、單なる必要勞働量のみに依つては解決し得ないのである。

マルクスは此點を如何に說明したかといふに、彼は一定の社會に於ては「單純なる平均勞働といふものが一定して居り、之を基礎として、他のあらゆる種類の勞働が之に換算されると考へたのである。即ち曰く

「……人間勞働とは特別の發達なき普通の各人間が平均して其身體組織の中に持つ單純勞働力の支出を意味する。勿論此單純勞働なる平均勞働それ自體は國と文化時代の異るに從つて性質を變更するものであるが、併し一定の社會に就て言へばそれは一定して居る。複雜なる勞働は要するに單純勞働の强められたもの、或は寧ろ倍加されたものに過ぎぬのであつて少量の複雜勞働は多量の單純勞働と等しきものとなる。」（註三五）と。

註三五　Marx; Das Kapital. Bd. I. S. 19. 資本論高畠譯、第一卷第一册、一四頁）

然らば何の程度まで强められ、何の程度まで倍加されるのかは一體何が之を定めるのか。

マルクスは續けて曰く「此換算が絶えず行はれることは經驗の示す所である。或商品は最も複雜なる勞働の産物であるかも知れない。然も其價値に依つて、それは單純なる勞働の生産物と等しからしめられ、斯くして又單純なる勞働の一定量を代表するに過ぎぬものとされる。種類の相異つた各勞働が其尺度單位として單純勞働に換算される樣々の比例は生産者の背後に於ける社會的行程に依つて定められるものである。隨つて生産者から觀ればそれは習慣に依つて與へられたるかの如き觀を呈して來る」（註三六）と。

註三六　Marx; Das Kapital. Bd. I. S 19. 高畠譯資本論第一卷、第一册一四―一五頁

マルクスの此說明が當の疑問の說明に爲つて居らぬことは明にベーム・バヴェルクの指摘する通りである。

或社會行程が、或は或經驗が實際に存在することは確である。又異種類の勞働が互に比較換算せられるとすれば、其換算の基礎を爲すものが各種勞働の價値でなければならぬことも亦疑ふ餘地は無いであらう。が一體價値に依る換算率を指定する所のその社會行程、其經驗は抑、何を基礎として生れるものであらうか。單に與へられたものとして假定することは許されるのであるか。否な斷じて許されぬ。何故かといへば斯る假定は、說明される可き當のものを豫定する循環說明を齎らすからである。ベーム・バヴェルクの言葉を借りて例示するならば次の如くである。

「かゝる事情の下に於て換算尺度の決定要因として「價値」並びに「社會的過程」を持出すことは何を意味するであ

らうか。外のことを一切度外視するならば、それは赤裸々なる、純然たる說明の循環を意味する。說明の對象は勿論商品の交換關係でなければならぬ。例へば彫刻家の一日の勞働を費された小彫像は、何故に石割人夫の五日の勞働を費された一車の割石と交換せられて、十日の勞働を費されたそれより多くの割石、或は三日の勞働しか費されなかつたより少い割石と交換せられないかといふことである。マルクスは我々に之を何と說明するか。彼は言ふ、其交換比例は此比例であつて他の比例ではない。何となれば彫刻家の勞働の一日は丁度單純勞働の五日に換算さるべきであると。然らば何故にそれは丁度五日に換算さる可きであるか。曰くそれがある社會的過程に依つて斯くの如くに換算せらるゝことを經驗が示すからであると。然らば此社會的假定とは如何なるものであるか。それは說明せらるべきそのもの、即ち彫刻家の一日の勞働の生產物を、その價値に於て、普通の勞働の五日の生產物と等位に置く所のそのものなのである。」（註三七）と。

註三七　Böhm-Bawerk; 竹原八郎譯、マルクス學說體系の終焉一三七頁

オッペンハイマーは此問題の說明を「性能」の概念の中に包含せしめるのである。

社會的に優れたる性能を認められて居るものはより高き所得を獲得し、劣等なる性能の所有者はより低き所得を受取る。性能の差異に基く所得の差異即ち勞働の價値の差異は何に依つて定められるのか言ふならば、オッペンハイマーはそれは「一定の社會に於て確定し得ると」いふ、經濟的靜態の理論に於て與へられたる材料を爲すものであるといふ。之では全く解答にならない。マルクスが「社會的行程」といふ言葉に隱れたのに對しオッペンハイマーは「性能」といふ言葉に訴へたといふ相違があるす丈けである。

抑、社會の各成員に一定の所得を獲得する能力が與へられて居ると假定すること自體が餘りにも明白な誤謬である。オッペンハイマーの意味する所得とは勞働の價値に外ならぬものであるから、勞働價値說に於て、勞値の價値は、如何なる種類、如何なる品質と雖も一定の比率に於て豫め定まつて居ると爲すのは、說明せらる可き當の問題を前以て假定して置くことである。

オッペンハイマーには其上更に犯さねばならぬ誤謬が「性能」の中に含まれて居る。といふのは外でもない。以前にその所得論に於て述べた如く、彼の經濟理論の出發點には心理學的基礎が置かれてある。「所得」概念を心理的に基礎附ける爲にはそれ故に、相等しい所得は相等しい主觀價値の獲得、反面に於ける相等しい勞苦の投入を意味すると想定することが必要であつた。併しながら此想定は既に指摘した通り事實と少しも合致せざる獨斷である。然るにそれにも拘らず自己の學說に論理的統一を與へる爲には、オッペンハイマーに取つて所得獲得の原動力たる「性能」の概念の中にも心理的要素を認める義務が在つたのである。（註三八）

註三八　K. Werner; Oppenheimers System d. liberalen Sozialismus. S. 47 f. 參照

正に其通りオッペンハイマーは各生產者のあらゆる個人的特性及び之に對する社會各員の主觀的評價をば「性能」の中に包含して居る。

例へば個人の肉體的特質、即ち筋力、熟練、敏感、優美等何れも「性能」の基礎を造る要素である。「最も重い槌を以て作業する鍛冶屋、一層多數の紡織機を使用することの出來る紡績家…平均以上に美しい娼婦等はより高き「性能」を持つものである。余は此最後の例を故意に選定する。といふのは蓋し、先づ第一には、經濟といふものが唯、單に物質的、即ち『眞正な』財貨のみに關するものでなく、尙ほ又欲望充足性を有する所の、費用のかゝるあらゆる對象換言すれば、欲求者の主觀的見解に從つて、其何等かの欲望を充足する效用性を有する所の、費用のかゝるあらゆ

る對象に關するものであることといふことを吾人の記憶に再度喚起せしむる理由からである。又第二には、狹義の『勞働』即ち『財貨を供給する勞働』を果す所の給付のみが價値を持つものであるといふ樣な危險な誤謬を防ぐ理由からである。狹義の勞働のみが價値ある給付でない次第は次の例に依つても明である、即ち揃ひの服を着せられて見世物に爲るより外には全く雇傭貸借せられぬ所の或給仕人は、若し此の勤務に必要な「性能」、即ち此場合は堂々たる姿體、尋常なる客貌が他の者に比較して一層優れて居れば居る程、一層高く評價せらるゝ所の『勤務』を給付するものである」（註三九）

註三九　Theorie; S. 469.

斯くの如くオッペンハイマーが自己の學說の出發點に忠實であることは、其限りに於て論理上正しいけれども、其結果は如何であらう。彼の純粹に客觀的なる可き價値論が主觀的要素に依つて侵害されることに爲りはせぬであらうか。

以上のオッペハイマーの所言は、即ち「性能」といふ或一定の所得を獲得する能力なるものが、單に一個人の腕力とか頭腦とか、或は一社會の生產技術といふ樣な客觀的要素に依つて影響される許りでなく、尙又之に對する需要者側の評價の程度如何に依つても影響されることを承認するものではないか。換言すれば「性能」を決定するものは、同種の「性能」所有者の存在量、と其「性能」の技術的能力の程度とそれから之に對する爾餘社會各員の主觀的評價とではないかと推定せられる。

此推定を裏書する言葉はオッペンハイマーの所言の中から容易に之を導き出すことが出來る。即ち彼は「性能」は「相對的なる經濟的稀少性に依つて決定せられると說く、「或る一般的に熱望されて居る特性――肉體的なものでも……精神的なものでも……よろしいが――が稀少であればある程、其特性を備へたる個人に對する社會的評價即ち其人の性能は高い」（註四〇）「其故に……性能は獨占狀態と著しく類似して居る。其故に又性能は……獨占と共に『競爭』の障害を爲すものである。」（註四一）個々の勞働力の所得は、一定期間に於ける「收益」より成るものであるが、それは其相對的稀少性の程度に應じて階等を定められる。性能が高ければ高い程其生產物の一單位當りの「個別的收益」も亦高い」（註四二）「併し給附が「財貨」として生產せられるならば、より高き性能は其稀少性の程度……に應ずる『價格』に於て、より高き收益を獲得する。」

註四〇　四一　W. u. K. S. 61-62.

註四二　註四三　Theorie; S. 469-470.

アルフッレド・アモンはオッペンハイマーが「性能」の假定に於て、一つの技術的能力と此能力を基礎として行はれる選擇といふ事實とを混同し、匿證倖爭の誤を犯して居ると述べて居る、即ち曰く、「オッペンハイマーは特に性能を認められたる者が或比較的高き所得を得るといふことを既に豫定する。何故かなれば、彼は一層高き所得を獲らす職業に就くものをば「特に性能を認められたもの」と呼んで居るからである。之は當然「能力」を豫定するものである。が併し、より高く支拂はるゝ生產物を生產する能力が此場合決定的なものなのではなく、此能力に基いて行はれる選擇、即ち人がより高く支拂はるゝ生產物を生產するといふ事實が決定的なものであるのである。」

註四四　A. Amon; Zur Oppenheimers, Neubegründung der objektiven Wertlehre." in Zeitschr. f. Volkswirts. u. Sozialpol. N. F. 5. Bd. S. 125. f, zit n. W. u. K. S. 55.

アモンの此批評は正しい。各人が何れ丈けの價格ある生產物を生產するかは各人の個人的能力のみに依つて定ま

るものではなく、それ丈の價格の生産物を造る機會を選擇するといふことに依つて決定せられるのである。而して各人が如何にして何の機會を選擇するかといふことは決して一定せらる可きものではない、何故かといへば、其選擇は生産物の價格が市場に於て何の程度であらうかといふ市場の事情如何、換言すれば、當該生産物に對する社會的需要の量と強さ如何に依つて影響せられるものだからである。其故に選擇も亦能力と同樣に「性能」の中に含めて之を一定せるものと看做すことは、市場に於ける價格は勿論、各人の需要の程度も亦一定して居ると想定することに外ならぬ。

奇妙なことにはオッペンハイマーはアモンの批評の正しいことを平然と承認し、然も自說を之に從つて改めることなく、反對にアモンの批評の方向に從つて、性能が單に個人的「能力」のみならず、之に基いて行はれる選擇の「事實」を共に包含するものであると述べて居る。（註四五）而して性能をば、或一定の所得を齎す能力とする定義の仕方では、之を單に個人的「能力」に基くものと誤解され易いといふので、アモンの批評に答へて次の如く改めて定義を下して居る「性能とは、生産者に對する社會的評價をば生産者の所得に依つて測定表現せるものである。……性能の階層は所得の相違に比例する。吾々は種々の生産者の性能を比較するに、其各自の所得に依つて測定するより外に途がない」（註四六）と。

註四五　W. u. K. S. 55.

註四六　W. u. K. S. 46.

此場合オッペンハイマーは「社會的評價」なる名稱を利用して、以て一個人の所得が各個人々々の主觀的評價の結果として定められるものでないことを暗に表現せんとして居る如く見受けられる。即ち社會的評價といふことを一つの、心理學的でない社會的な既定事實として受取らしめんと考へたかの如く察せられる。併しながら互に生産者同志が其經濟行爲に於て自由競爭を實行することに依つて成立する所の市場經濟の社會に於て、其結果として發生する所の社會的經濟現象をば、或特殊の社會的なるものとして假定して仕舞ふことは、正にヴイスの指摘する通り（四七）妥當ではない。價格現象の說明の爲に、財貨なり勞働給付なりに對して社會的評價といふ言葉を用ひるならば、それは當然多數の個人に依る評價と同心意味であると解すべきである。此見地よりすれば、オッペンハイマーの價値論は既に茲に於て主觀的價値說に降參して居るものと見ることが出來るであらう。

註四七　Probleme der Wertlehre, Schriften d. Verein f. Soap. 183, II S. 49-50.

由是觀之オッペンハイマーの價値論が少しも價値の說明になつて居らぬことは明である。彼は豫め價格が一定して居ると假定する。而して一定して居るとすれば各人の所得が一定すると假定するといふ。之は純然たる同義語反覆以外の何物でもない。而してオッペンハイマーは既に其出發點に於て、一定の價格を假定する準備として、之に影響する一切の主觀的要素を非論理的に或は切斷し或は排除する。斯樣に主觀的要素を無視して置いて、所得は、正常的性能を認めらるゝ限界的生産者の勞働の價値のみより爲り、從つて價格も又生産物に含まるゝ勞働の價値に依つて定まると主張するのである。

若しオッペンハイマーの客觀的價値論が正しいものだとするならば從來のあらゆる客觀的價値論は正しいことになり、同時に同樣の論法を以てあらゆる主觀的價値論も亦正しくなるであらう。即ち價格に影響する一切の客觀的要素を無視し又は一定せるものと假定して置いて價格の形成を主觀的に說明すれば、それで客觀的要素を含まぬ所の徹底的な主觀的價値說が成立つ筈だからである。

抑、「限界的生產者」といふ概念其自體が主觀的要素なくしては成立たぬことにオッペンハイマーは氣付かぬのであらうか。

彼は「正常の性能を認められたる限界的生產者の意味をば曩に指摘した樣に（註一五參照）リカードーに從ひ、「最も惠まれざる狀態の下に於て生產を執行する所の者で世間普通の能力を備へたるもの」と解して居る。

「正常的」又は「平均的」といふ用語は、社會全體の大數的觀察に依つて得らるゝ概念とすればさしたる問題ではないが、「限界的」といふ概念は主觀的要素を俟たずして構成せらるゝ概念でないことは明である。「最も惠まれざる狀態」といふのは、經濟學上、當然、其社會一般に於て最も不利なる狀態を意味するのでなく、市場に參加する生產者の中で最も不利なる地位にある者の地位の意味であることは疑ひ無い。

オッペンハイマーも亦此事は明に認めて居る。即ち「限界生產者」の概念に關する疑義に答へて次の樣に述べて居る「限界生產者とは……市場が尙ほ必要とし從つて又生產費以上の價格で買取らんとする生產物の生產者の中で最も惠まれざる狀態にある正常の生產者」（註四八）であると。

註四八　W. u. K. S. 63.

「市場が尙ほ必要とし從つて生產費以上の價格で買取らんとする所の生產物」の量を決定するものは、取りも直さず需要の量と强さではないか。

何の生產が最も惠まれざる生產者であるかは市場の要求する程度如何即ち有效需要の量に依つて定められる。然りとすれば限界生產者の所得が價格を決定するといふ命題は、價格が、需要に依つて影響されるといふことを意味するものに外ならぬ。かゝる命題を以て客觀的價値論を改良したといふオッペンハイマーの議論は矛盾の甚しきものといふべきである。

ビリモヰッチは「性能」の概念を分析し、此中には三種の全然異つた要素が混合されて居ると說いて居る。即ち「一、生產物の評價―換言すれば之に對する需要の强度二、此生產物をば一定の成果を以て生產する一個人の技術的能力及び三、生產物の價格に依存する所の、當該個人の所得」（註四九）即ち之である。

註四九　A. Bilimovitch, Grenzkosten und Preis, in Zeitschrift f. Nationalök. Bd. I. 1930. S. 371.

オッペンハイマーは嘗て、性能が唯、單に個人的能力を意味する許りでなく、其所得に依りて測定せる、生產者の社會的評價の表現であることを說明する爲に拳鬪選手の例を引いたことがある。而して其際今日一拳鬪選手が著名な學者よりも百倍の所得を獲、最も偉大なる學者や藝術家が其天稟の生產物よりして時として殆ど全く所得を享受せぬことがある點を指摘し、自己の言ふ「性能」は「此等の稀らしい事情をも總て殘らず包括するものである」（註五〇）と述べて居るのである。

註五〇　W. u. K. S. 56.

ビリモヰッチは此例を引用して次の如く論證する、

「例之、オッペンハイマーの愛好する拳鬪選手に就ていふならば、第一の要素は、――尋常ならざる拳鬪家を觀賞せんとするアメリカ人の欲望の强度、第二の要素は――其拳鬪選手の特種の巧妙さ、强さ等々、第三の要素は――給付の高き價格と當該選手の高き所得に相當するものである。……オッペンハイマーは第三の要素を性能の中に包含することに、依つて次の如き誤れる命題に達する。即ち『全生產者が何れも皆一定の高度の性能を以て評價され、而して其に相當する所得を得るといふことは吾々に與へられたる經驗的材料である』（Zeitschr. f. Vw. u.

Soz.p., 5. Bd., 7 bis 9 H., S. 569. 1926)と。……『與へられたる經驗的材料』として觀察せらるゝものは唯、欲望の强度と生產者の技術的能力のみである。給付の交換價値は、併しながら決して『材料』ではなく、一つの「問題」である。而してアモンの指摘せる如く、此價値の『社會的評價』こそは正に說明せらる可き所の『當の價値並に價格の形成過程』である。」（註五一）と。

註五一　Bilimović; a. a. O. S. 371.

之を要するに舊き客觀的價値理論を救ふ爲に試みたオッペンハイマーの計畫は失敗に歸したといふことが出來る。先づ第一に出發點に於ける心理學的基礎付けに於て、第二に之を基礎とする所得の概念に於て、第三に勞働價値說の最大弱點の一つたる、異種勞働の價値に關する問題を解決せんとせる「性態」の概念に於て、何れも皆正しいと認められるものは勿論、舊き勞働價値說に優ると考へられるものは一つも無い。

四

オッペンハイマーは以上記述以外の更に他の方面に於ても、舊き勞働價値說を改良せんと試みたと見受けらるゝ所がある。即ち從來の客觀的價値學說は「任意に再生產し得る財貨」のみに適用されるものであつて、任意に再生產し得ざる財貨には當嵌らぬ。之はあらゆる財貨を一つの鑄型より說明すると稱する限界效用說が自ら以て客觀的學說に優る所以の一となす所であるが、オッペンハイマーは此點に於て限界效用說に贊意を表して居るのである。

それから又マルクスの勞働價値學說が平均利潤率の問題の爲に解決すべからざる矛盾に落入つて居ることを指摘して、自說に於ては、資本利潤が階級的獨占に基く一般的な搾取即ち一種の獨占利益であると解釋せらるゝから、マルクスに於けるが如き矛盾は生れぬと稱して居る。資本利潤に關する問題はオッペンハイマーの靜態理論に於ける價格形成論に直接の關係が無いから此處では省略することゝし、（註五二）ウェルナーの所論に據つて先に擧げた問題を簡單に檢討することゝする。（註五三）

註五二　オッペンハイマーの資本利潤の問題に就ては、Budge: Der Kapitalprofit, 1920. Heiman: Mehrwert u. Gemeinwirtschaft, 1922. Schumpeter: Das Bodenmonopol, Arch. f. Sozw. u. Sozpol., 42. Bd. 及び Werner: Oppenheimers System des liberalen Sozialismus 等を參照されたし。

註五三　Werner; a. a. O. S. 38 ff.

オッペンハイマーは、「あらゆる價値現象が一つの鑄型より、然も完全に」說明せられねばならぬといふベーム・バヴェルクの所言に贊成して次の如く述べて居る。

「此種の二元主義又は三元主義はあらゆる種類の古き客觀的價値說に當嵌る。其第一卷の決定的敍述の部分に於て獨占の場合を全然考慮せぬ所のマルクスには特に適切に當嵌る。一方リカードーは自ら卑下して獨占財の一團を除ば常に通則からの例外と看做し重要なる分配の問題には意義なく又害なき些細なる一群に關するものに過ぎぬといふ但書を以て此種の對象を此上更に論議することを避けて居る。

「斯る評價が此上なく誤れるものであることは吾人の努めて以て指摘せねばならぬ所である。併し重要であるにせよ、果た又無きにせよ、無害にせよ有害にせよ、此種の財貨も亦それ丈けの考慮を要求するものである。如何なる價値論と雖も、可增財及び不可增財、獨占財及び任意再生產可能の財の價値をば一切殘らず包括する所の形式に於て導き出すことの出來るものでない中は完全なものとして之を承認すべきで無い。」（註五四）と。

註五四　Theorie; S. 780-781.

それではオッペンハイマーの勞働價値說は一體如何にして古き勞働價値說の此弱點を切拔けるのであるか。

吾人が此處で驚嘆せねばならぬことには、オッペンハイマーは、何等の言譯もせずに平然とリカードーと同樣の勞働時間說を價値理論に採用して居ることである。彼の理論の中心は任意可增財に在り、其命題は「任意に再生產し得る產物の靜的價格は其生產に關係せる生產者全體が之の爲に費したる勞働時間に比例する」（註五五）といふことである。任意に再生產の出來ぬ財貨、即ち自然的又は法律的の獨占財は如何にして說明せられるのであるかといふに、オッペンハイマーの說明によれば上記の命題が獨占事情の爲に更改せられねばならぬことを說明して居る。即ち或財貨の生產が獨占的關係の下に於て行はれる場合には、曩に示した通り、當該生產物の價格は、普通の自由競爭の下に於ける如く $v = \frac{E}{n} + s$ なる公式に依つて表はされずに $v = \frac{E+m}{n} + s$ に依つて表はされる。$+m$ とは即ち獨占に基く收益額又は損失額である。

註五五　W. u. K. S. 27.

換言すれば獨占的事情の下に生產するあらゆる財貨は、單に勞働時間のみに比例して交換せられないで、費されたる勞働量の價値と、獨占に基く收益又は被獨占に基く損失との和が當該產物の價値を決定することに爲る。即ち斯種生產物の價値を決定する原因は勞働量と獨占的事情とであることに爲る。

斯る有樣では、あらゆる財貨の價値を一元的に說明することはオッペンハイマーには到底不可能であると言はねばならぬ。加ふるにオッペンハイマーに在つては獨占の意味が通例の解釋よりも著しく廣汎に渡つて居るから、リカードーの如くに分配論上重大ならざる一例外事項として獨占財の價格形成を除外視することは彼の理論の適用範圍を著しく狹めることに爲るのである。

即ち普通例の解釋に依れば、獨占とは理論上競爭が全く排除されて居る狀態を指すものである。然るにオッペンハイマーの場合は、唯、供給が任意に增加し得ぬこと、換言すれば自由競爭が唯、制限されて居るといふこと丈けが獨占の特質を爲すものなのである。其故に縱令ひ競爭が行はれて居つても、それが不完全であり、財貨の價格が爲に競爭價格と一致せぬ場合は即ちオッペンハイマーに取つては其價値法則の例外を爲すものと爲るのである。

「任意に增加し得る財」とは何を意味するか。「任意に增加し得る」とは當該財貨の供給が正に觀察せらるゝ生產範圍內に於て且つ又正に存在する價格に於て猶ほ常に增大する需要に追墮することの出來る場合を指すものゝ如くである。（註五六）蓋し、オッペンハイマーが小麥は最初は任意に增加し得る財であるにも拘らず、一度び耕地が總て利用し盡され、然かも耕作の集約度が最高度にまで及ぶ場合に於てそれは獨占財と爲ると（註五七）言ふのである。之に由つて類推するならば、より以上の生產の增加の爲に、非常に高い費用が必要に爲るといふ場合は、即ち任意に增加し得ぬ場合即ち獨占に相當するのであらう。

註五六　Werner; a. a. O. S. 42 參照

註五七　Theorie; S. 477 參照

獨占價格の意味を斯樣に廣く、靜態價格の意味を非常に狹く解釋することは取りも直さず自己の價値法則の適用範圍を著しく弱めることに等しい。オッペンハイマーの當初の目的の一つ、即ち價値法則は一元的でなければならぬといふ主張は自から全く之を否定した結果に陷入つた譯である。

加之、オッペンハイマーが獨占をば彼の靜態理論より排斥する理由が又頗る非論理的である。彼は獨占を二つに分ち、法律上の獨占と自然的獨占とする。而して前者に就いては、それが或は專賣特許權の如く期限附きのもので

あるか、或は外部の潜在的競爭に脅かされて長續きせぬものであるとの理由を以て、非常に長期間を觀察する所の靜態理論の領域に屬さぬと主張するのである。（註五八）

註五八　Theorie; S. 504.

併しながら此理由は首肯し難い。抑、靜態なるものは一つの假定に過ぎぬのであるとは云へ、經驗を基礎として作り上げられるものである。オッペンハイマーに於ける靜態の假定は「材料の不變性」（註五九）である。彼は例へば「靜態的社會に於て、人口の年齢上並に體性上の構造が全體に於て全く變化せぬ樣に人の出生並に死去が分配されて居る……」と假定する。此假定は現實とは一致せぬが併し、經驗から得られたるものに外ならぬ。若し經濟現象の說明に更に忠實ならんとするならば、之に對して重大なる影響を及す所の「獨占」も亦當然一つの材料として其不變性を假定せらるべき筈である。唯、單に存續期間が短いといふ理由を以て之を排斥するのは些か根據薄弱である。

註五九　W. u. K. S. 13. Theorie; S. 610

ましてカルテル・トラストの獨占形態の如く其存續期間頗る永く半永久的素質あるものに於てをや。單に存續期間の長短が問題となるのであるならば、それ〴〵特種の性能を有するあらゆる經濟主體は、之を任意に增加し得ず、又其生命は永からざるが故に獨占の一部に屬するものと看做してよい筈である。

自然的原因に基く獨占に就ては、オッペンハイマーはそれが頗る稀少にして重要なるざる種類の財貨に關するものであるの故を以て之を論ずることを欲せぬ。此辯明は必しも承諾し難きものではないが、反面に於てオッペンハイマーの當初の目的即ちあらゆる財貨の價値の一元的說明を放棄するものであることを意味するものでなければならぬ。

之を要するにオッペンハイマーの樹立する新しき客觀的價値學說は其如何なる部分に於ても古き客觀的價値學說に優るとは言はれぬ。否な寧ろ、幾多の論理上の矛盾、匿證佯爭の誤を犯す點に於て、後者を改惡せるものと評すべきである。古き勞働價値學說が其反對者連特に限界效用學說に依つて指摘された所の其弱點を蔽ふ爲にオッペンハイマーは經濟學の出發點に心理的の基礎付けを行ひ靜態理論に於ける假定の一つとして「性能」の新概念を導入したのであるが、それは既に明なる如く全く失敗である。彼が自ら取入れた所の價値の主觀的要素は、中途に於て或は無殘にも獨斷的に切斷排除され或は不當にも無視されて仕舞つて居る。

オッペンハイマーの價値論を其獨斷の淵から救ひ上げ、正當なる方向へ戻す爲には、先づ第一に其「性能」の概念を整理することが必要である。性能とは既にピリモウッチの指摘せる通りオッペンハイマーに於ては各人の主觀的評價と財貨の生產に必要なる生產手段の數量を表示する所の技術的係數と、財貨の交換價値との三つの混合概念であつた。此中假定として吾々の必要とするものは前二者である。又經驗的に見ても、主觀的評價と技術的係數とを一定するものと假定することは、正しいであらう。價格形成過程の說明の爲に必要な今一つの假定は、交換價値の一定といふことでなく根本的生產手段の數量の一定である。根本的生產手段の數量が一定して居れば、其社會の一定技術の支配する生產狀態の下に於て生產物の存在量亦一定する筈である。生產物の存在量が一定すれば、之に對する主觀評價に從つて其限界的價値は容易に說明せらるゝであらう。

即ち生產物の價値を決定する原因は、經濟主體の評價といふ主觀的要素と、根本的生產手段の數量並に技術的係數といふ客觀的要素との二方面に在るものである。オッペンハイマーの誤謬の根本的原因は此主觀的要素の資格を

全く剝奪し、無視して仕舞つたことに在る。

若し彼が主觀的價値と技術的係數とにそれ〴〵獨立の意義を認めるならば、性能の相違といふことは、技術的係數の相違として解釋が出來るし、限界的生産者の概念は、正しく主觀的價値に照應して正確に之を定めることが出來るであらう。それと同時に經濟理論の出發點に特に所得の概念を置いて、其心理學的基礎と、客觀的價値說との間の媒介を之に依つて實現せんとする苦しい努力を拂ふ必要がなく、それから又、異種勞働相互間の價値關係をば或は社會的過程に或は性能に依據して同義語反覆の誤を犯す必要もなく、最も論理的に、心理學的基礎から主觀的價値の說明に移行することが出來るであらう。限界效用學說は正に斯くの如き立場に立つものである。（註六〇）

註六〇　本稿に於て尙ほオッペンハイマーの限界效用說批判に就て論及する所存であつたが、彼の客觀的理論の批判に意外の紙數を費し、又他日效用說批判に就て稿を改めて述ぶる機會のあるべきを思ひ玆に一先づ擱筆する

大ロンドン北西部一帶の工業調査

（The Industries of Greater London. Being a survey of the recent industrialisation of the northern and western sectors of Greater London. by D. H. Smith. London, P. S. King & Son, Ltd. 1933.）

奥井復太郎

現代大都市構成の根本的要素に、經濟的分子の一つとして工業的要素が、最重要の地位を占めてゐる事は、異議なく認められよう。政治的・行政的・商業的要素も、勿論、重要なる意義を持つ。そして、表面上からは、現代大都市構成の要素として直接に、工業經濟が及ぼす勢力は二次的の樣に思はれるかも知れない。例へば、多くの人々が東京は、生産都市でなくして、消費都市だと云ふ。工場生産的の意味から云へば、福岡縣下の都市群（福岡、直方、飯塚、門司、久留米、八幡、小倉、戸畑、大牟田、若松）は明らに、都市構成上に於いて工業的要素を最も顯著に表明してゐる。丁度、マンチェスタアーバンミンガム市の、ロンドンに對する樣に。しかし、東京にとつて、或ひは日本全體にとつて京濱工場地帶は、重要な工業經濟地域である。而して行政上では兎に角、經濟上、社會上から見れば川崎市、横濱市（工業地域の關する限りでは主として神奈川、鶴見兩區）は大東京の領域に屬するものである。